

検査情報月報



横浜市衛生研究所

平成25年8月号 目次

【トピックス】

- 横浜市における2012/2013シーズンのインフルエンザウイルス流行株の解析 …………… 1
- 平成24年度薬事検査について …………… 5

【感染症発生動向調査】

- 感染症発生動向調査委員会報告 平成25年7月 …………… 6

【情報提供】

- 衛生研究所WEBページ情報(平成25年7月分) …………… 10

横浜市における2012/2013シーズンの インフルエンザウイルス流行株の解析

- 横浜市における2012/2013シーズンのインフルエンザの流行は、AH3型ウイルスが主流であり、分離・検出数の84% (180件) を占めました。B型ウイルスは15% (32件) の割合で、このうち山形系統が81% (26件) を占め優勢でした。AH1pdm09ウイルスは2株分離されたのみで流行はみられませんでした。
- AH3型ウイルスの抗原性状は、ワクチン株と類似していました。HA遺伝子系統樹解析ではワクチン株と同じサブクレード3Cに含まれました。
- B型ウイルスの抗原性状は、山形系統ではワクチン株と類似していましたが、HA系統樹解析ではワクチン株とは異なるクレード2に含まれました。一方、ビクトリア系統ではレファレンス株と類似しており、HA系統樹解析でも昨シーズン流行株と同じクレードに含まれました。
- AH1pdm09ウイルスの抗原性状は、ワクチン株と類似していましたが、HA系統樹解析では、海外で流行している株同様クレード7に含まれました。
- 抗インフルエンザ薬感受性サーベイランスでは、耐性株による地域流行はみられませんでした。

【インフルエンザ様疾患の患者数】

2012年6月から2013年5月までにインフルエンザ定点(小児科91定点および内科59定点:計150定点)から報告されたインフルエンザ様疾患患者数は、定点あたり193人で昨シーズン同期の319人を下回り、過去10年では6番目の規模の流行でした。今シーズンは第51週(12月17日からの週)に流行の目安となる定点あたりの報告数1.0人を超え、第4週(1月21日からの週)に41.5人とピークとなりました。その後、第7週(2月11日からの週)には9.9人と急激に減患者数が減少し、第18週(4月29日からの週)に定点あたり1.0人を下回りました(図1)。

【病原体定点ウイルス調査】

病原体定点ウイルス調査においては624件(鼻咽頭検体538件、便由来検体59件、気管支吸引液5件、嘔吐物5件、うがい液4件、髄液1件、不明12件)を検査し、AH3型ウイルス110件、B型ウイルス31件、AH1pdm09ウイルス1件が分離・検出されました。

AH3型ウイルスは第45週(11月5日からの週)に青葉区の定点からウイルス遺伝子が検出され、第49週(12月3日からの週)には港北区と瀬谷区の定点から初めて分離されました。その後、第5週(1月28日からの週)をピークに第15週(4月8日からの週)まで分離・検出されました。一方、B型ウイルスは第49週(12月3日からの週)に港北区の定点から山形系統のB型ウイルスが、第9週(2月25日からの週)に戸塚区の定点からビクトリア系統のB型ウイルスが分離されました。B型ウイルスは両系統のウイルスが混在したまま、第10週(3月4日からの週)をピークに第20週(5月13日からの週)まで分離・検出が続きました。AH1pdm09ウイルスは1月第2週の磯子区定点で1株分離されたのみでした(図2)。

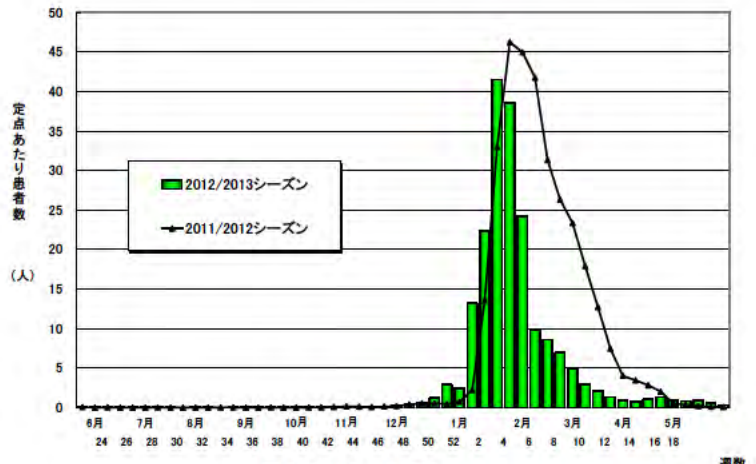


図1 定点あたり患者数

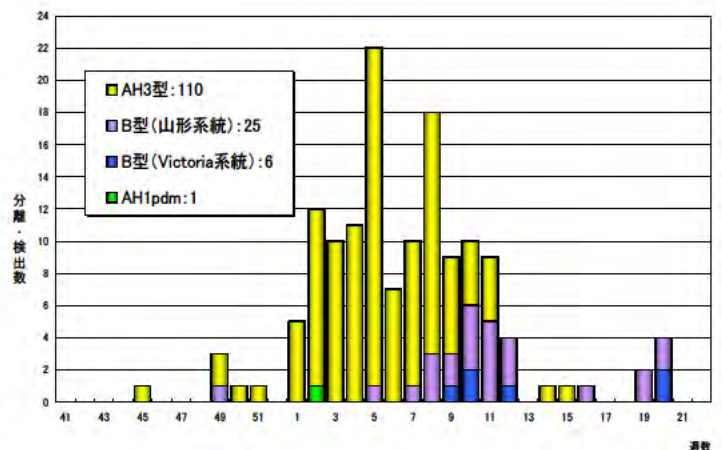


図2 病原体定点等ウイルス分離・検出状況

【集団かぜ調査】

集団かぜ調査では、2012年9月7日(第36週)に保土ヶ谷区の福祉施設から、また、9月11日(第37週)には緑区の保育園から報告があり、AH3型ウイルスが分離・検出されました¹⁾。その後、流行期に入った1月第3週に市内18区中6集団、第4週に10集団の発生がみられピークを示しました。終息までの発生数は18区204施設175学級で、検査依頼のあった20集団80人についてウイルス学的調査を実施し、20集団すべてからAH3型ウイルスが分離・検出されました(表1)。

【入院サーベイランス】

入院サーベイランスでは、74件を検査しました。非流行期の7月に5検体からAH3型ウイルスが分離され、このうち3件は74歳、86歳、95歳と高齢者の患者でした。シーズン初めの9月には、タイからの輸入例でAH1pdm09ウイルスが1株分離され、10月には山形系統のB型ウイルスが分離されました¹⁾。最終的に分離・検出されたインフルエンザウイルスはAH3型ウイルス12件、AH1pdm09ウイルス1件、B型ウイルス(山形系統)1件でした。このうちインフルエンザウイルスを確定した入院例は、脳症1例(AH3型ウイルス)、肺炎3例(AH3型ウイルス)でした。インフルエンザ以外のウイルスではコクサッキーウイルスA型3件、エコーウイルス3件、ノロウイルス2件、アデノウイルス2件、ヒューマンメタニューモウイルス1件が分離・検出されました。

各調査期間の検査合計は806件で、AH3型ウイルス180件、B型ウイルス32件、AH1pdm09ウイルス2件が分離・検出されました(表2)。

表1 集団かぜ調査結果

発生年月日	週	区	施設	検体数	ウイルス分離		遺伝子検査				総合判定		
					ウイルス型	分離数	分離陰性 検体数	HA遺伝子	NA遺伝子	NA遺伝子			
2011. 9. 7	第36週	保土ヶ谷	福祉施設	3	AH3 ¹⁾	1	2	陰性	0	陰性	0	AH3	1
9.11	第37週	緑	保育園	5	AH3	4	1	陰性	0	陰性	0	AH3	4
2013. 1.15	第3週	青葉	小学校	3	AH3	2	1	陰性	0	N2	1	AH3	3
1.15	第3週	磯子	小学校	5	AH3	5	0	-	-	-	-	AH3	5
1.16	第3週	港南	小学校	5	AH3	3	2	陰性	0	N2	1	AH3	4
1.16	第3週	港北	幼稚園	4	AH3	2	2	陰性	0	N2	1	AH3	3
1.17	第3週	瀬谷	小学校	2	AH3	1	1	陰性	0	N2	1	AH3	2
1.18	第3週	戸塚	中学校	4	AH3	4	0	-	-	-	-	AH3	4
1.21	第3週	中	中学校	5	AH3	3	2	H3	1	N2	1	AH3	4
1.22	第4週	栄	小学校	4	AH3	3	1	陰性	0	N2	1	AH3	4
1.22	第4週	神奈川	小学校	3	AH3	2	1	陰性	0	N2	1	AH3	3
1.22	第4週	旭	小学校	5	AH3	5	0	-	-	-	-	5	
1.23	第4週	泉	小学校	5	AH3	4	1	陰性	0	陰性	0	AH3	4
1.23	第4週	金沢	小学校	5	AH3	4	1	陰性	0	陰性	0	AH3	4
1.24	第4週	保土ヶ谷	小学校	3	AH3	2	1	陰性	0	N2	1	AH3	3
1.24	第4週	都筑	高等学校	3	AH3	2	1	陰性	0	N2	1	AH3	3
1.24	第4週	鶴見	中学校	4	AH3	2	2	陰性	0	N2	1	AH3	3
1.25	第4週	南	小学校	3	AH3	3	0	-	-	0	0	AH3	5
1.28	第5週	西	幼稚園	4	AH3	2	2	H3	2	N2	2	AH3	4
2. 4	第6週	緑	小学校	5	AH3	2	3	陰性	0	N2	3	AH3	5
合計		18区	20施設	80件	AH3	56株	24件	H3	3件	N2	15件	AH3	71件

注 遺伝子検査のうち一は未実施

表2 インフルエンザウイルス分離および遺伝子検査結果

各調査項目	検体数	インフルエンザ陽性数	AH3型	B型	AH1pdm09
病原体定点等調査	624	141	109	31	1
集団かぜ調査	80	59	59	0	0
入院サーベイランス	74	14	12	1	1
その他依頼検査	28	0	0	0	0
合計	806	214	180	32	2

【分離株の抗原性】

今シーズンから、ワクチン株の抗血清がこれまでのフェレット感染血清からウサギ免疫血清に変更になったため、HI価の差で類似性を正確に比較することができなくなりました。図3の抗原性状は参考値です。AH1pdm09ウイルスはワクチン株であるA/カリフォルニア/07/2009と同等または2倍差でした(図省略)。AH3型ウイルスはワクチン株A/ビクトリア/361/2011と22.4%が同等、61.2%が2倍差、16.4%が4倍差でした。B型ウイルスでは、ビクトリア系統のウイルスはレファレンス株(昨シーズンのワクチン株)であるB/プリズベン/60/2008と20.0%が同等で、2倍および4倍以内の値を示した株がそれぞれ40.0%でした。山形系統のウイルスはワクチン株であるB/ウィスコンシン/01/2010と96.0%が4倍以内の反応性を示しました。なお、国立感染症研究所で解析した横浜株はAH1pdm09ウイルス2株、AH3型12株、山形系統のB型4株、ビクトリア系統のB型2株は、すべてワクチン株と4倍以内の反応性を示し、類似した性状でした。

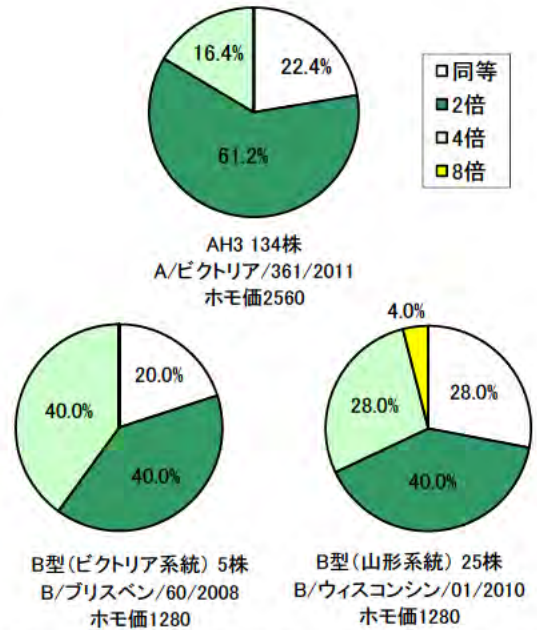


図3 2012/2013シーズン分離株のワクチン株に対するHI価

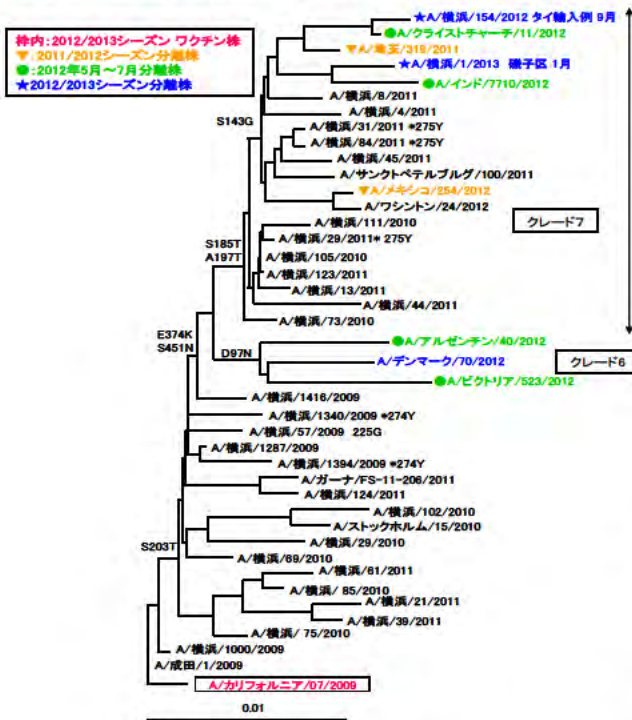


図4 AH1pdm09ウイルスのNJ系統樹

【分離株の系統樹解析】

抗原性に関与するHA遺伝子についてPCRで増幅後、ダイレクトシーケンス法により塩基配列を決定し、Neighbor-joining法により系統解析を行いました。

AH1pdm09ウイルスについては2010/2011シーズン以降国内での流行はなく、昨シーズン海外で流行している株の大多数はクレード6とクレード7でした。今シーズン分離された2株はいずれもS185T、A197T、S143Gのアミノ酸置換が共通のクレード7に含まれました(図4)。

AH3型ウイルスについてはワクチン株のA/ビクトリア/361/2011を含むサブクレード3Cに含まれ、昨シーズン分離株や7月の分離株からさらにN145Sのアミノ酸置換が共通でした(図5)。

B型ウイルスの系統樹は大きくビクトリア系統と山形系統の2つの枝に分かれます。今シーズンのビクトリア系統の分離株はレファレンス株のB/プリズベン/60/2008と同じクレードに含まれました。

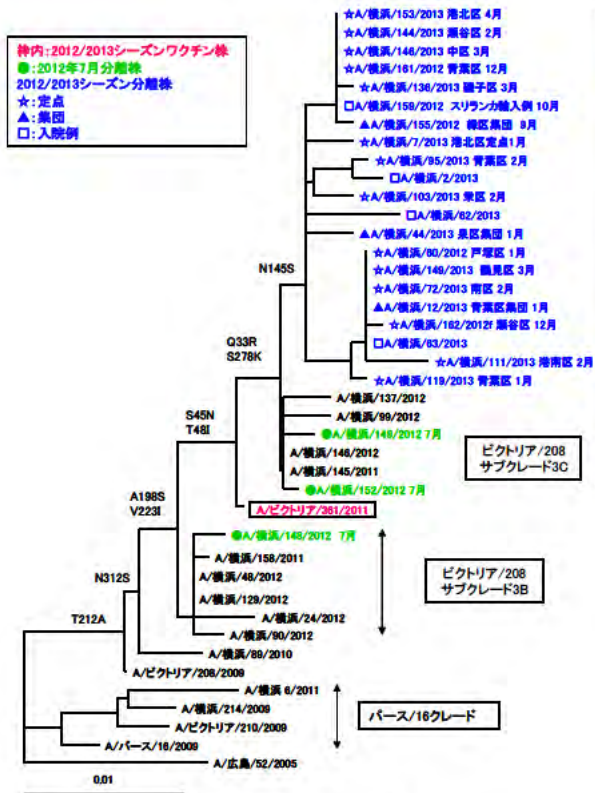


図5 AH3型ウイルスのNJ系統樹

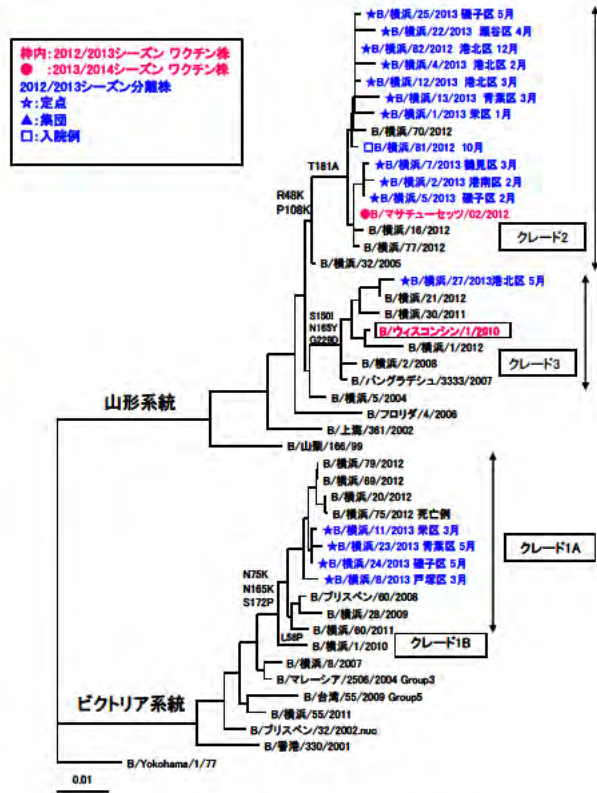


図6 B型ウイルスのNJ系統樹

山形系統のウイルスの多くはワクチン株B/ウィスコンシン/01/2010とは異なり、P108K、T181Aのアミノ酸置換が共通のクレード2に含まれました。WHOの2013/2014シーズン北半球ワクチン推奨株にはクレード2に含まれるB/マサチューセッツ/2/2012が選ばれました²⁾(図6)。

【抗インフルエンザ薬感受性サーベイランス】

全調査で分離したうち、AH1pdm09ウイルス2株、AH3型ウイルス180株、B型ウイルス32株について、ノイラミニダーゼ阻害薬に対するNA遺伝子耐性変異部位を調べました。AH3型ウイルスはM遺伝子においてはアマンタジン耐性変異(S31N)をもっていました。NA遺伝子では耐性変異はみられませんでした。また、AH1pdm09ウイルスとB型ウイルスのNA遺伝子においても耐性変異はみられませんでした。

【おわりに】

横浜市におけるインフルエンザの流行はAH3型ウイルスとB型ウイルスによる混合流行であり、過去10シーズンでは6番目の規模でした。AH3型ウイルスは抗原性状および遺伝子解析でもワクチン株と類似していました。また、B型ウイルスは山形系統のウイルスが2004/2005シーズン以降8シーズンぶりに主流となりましたが、小規模な流行でした。AH1pdm09ウイルスは2シーズンぶりに分離されましたが、全国的にも流行はありませんでした。しかし、ヨーロッパではAH3型ウイルスより大きな流行となったことから²⁾、来シーズン以降注意が必要です。

季節性インフルエンザ以外では、米国のブタAH3N2型バリエーションウイルスや中国のトリAH7N9型ウイルスの人への感染が報告されており、今後も動向を監視する必要があります。

参考資料

1. 国立感染症研究所. <速報>2012/13シーズン最初に分離されたA(H1N1)pdm09、A(H3N2)亜型およびB型インフルエンザウイルスの性状—横浜市. 病原微生物検出情報 2012;33:300-302.
<http://idsc.nih.go.jp/iasr/32/381/pr3812.html>
2. WHO. Recommended composition of influenza virus vaccines for use in the 2013-2014 northern hemisphere influenza season. Weekly Epidemiological Record 2013; 88: 101-116.

平成24年度薬事検査について

平成24年度は健康福祉局医療安全課の依頼により、いわゆる健康食品の試買検査を実施しました。

◇ いわゆる健康食品等の検査

「ダイエット」、「痩身」等を標榜している「いわゆる健康食品」7検体について、センナ、フェンフルラミン、N-ニトロソフェンフルラミン、エフェドリン、プソイドエフェドリン、メチルエフェドリン、ノルエフェドリン、甲状腺ホルモンの検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

また、強壮効果を標榜する「いわゆる健康食品」22検体について、シルデナフィル、タダラフィル、バルデナフィル、ホンデナフィル、キサントアントラフィル、チオキナピペリフィル、メチルテストステロン、ヨヒンビンの検査を行いました。その結果、ヨヒンビンが1検体から検出され、医療安全課に報告しました。

要注意健康食品シリーズ⑪

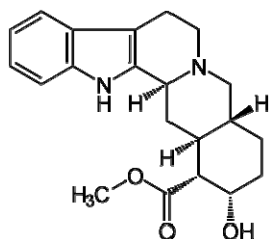
～ヨヒンビンについて～

ヨヒンビンとは、ザイールやカメルーンなどに生育するアカネ科の植物ヨヒンベ(*Pausinystalia yohimbe*)から発見されたアルカロイドに属する成分です(構造式は下図のとおり)。特にヨヒンベの樹皮は古くからアフリカの民間療法で強精、媚薬として使用されてきました。ヨヒンベは国外では食品の範疇に入ることもありますが、日本では「専ら医薬品」の扱いとなっています。また、ヨヒンビンは劇薬に指定されており、その塩酸塩は、勃起障害改善のための医薬品として販売されています。ヨヒンビンは、妊婦・授乳婦または小児は使用するべきではなく、専門家の指示のもと以外では使用してはいけない成分です。また、長期間の使用は不可で、副作用として神経興奮、震え、不安、心拍数の増加、動悸、血圧上昇、吐き気などがあります。

当所では平成22年度から24年度においての試買検査および健康被害の原因究明調査で、いわゆる健康食品3検体からヨヒンビンを検出しました。ヨヒンビンの薬効から強壮・強精を謳った製品が多い中、ダイエットを目的とした製品にもヨヒンビンが含まれていました。同様な事例を大阪府でも発表しており、想定外の成分についても見逃さないように監視、検査を行っていく必要があります。ヨヒンビンが含まれていた製品についての詳細は、厚労省ホームページ(アドレスは下記に表示)を参照してください。

厚労省ホームページ：“強壮目的で使用される医薬品成分が検出された製品について”

<http://www.mhlw.go.jp/kinkyu/diet/other/060119-1.html>



ヨヒンビンの構造式

分子式 $C_{21}H_{26}N_2O_3$

分子量 354.5

【 検査研究課 薬事担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 7月

《今月のトピックス》

- 手足口病が流行しています。
- 風しんの流行が続いています。
- 夏休みの海外旅行先における感染症に注意が必要です。

全数把握疾患

7月期に報告された全数把握疾患

細菌性赤痢	1件	劇症溶血性レンサ球菌感染症	1件
腸管出血性大腸菌感染症	6件	後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)	2件
腸チフス	1件	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1件
デング熱	1件	梅毒	1件
レジオネラ症	4件	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1件
アメーバ赤痢	3件	風しん	40件
急性脳炎	1件		

<細菌性赤痢>

Shigella sonnei(D群)の報告が1件ありました。渡航先(インド)での感染が推定されています。

<腸管出血性大腸菌感染症>

6件(O157 VT1VT2 4件、O157 H7VT1VT2 1件、O157 VT2 1件)の報告がありました。このうち、1件では同居家族内発症がありましたが、感染原因は調査中です。本症は例年これからの季節に多く報告されています。家庭内での感染予防法は手洗いが重要です。さらに、下痢症状がある人は専用のタオルを使うなど、他の人と使うタオルを別にしましょう。トイレは常に清潔に掃除し、ドアノブ・水洗レバー・電気のスイッチなど手の触れるところは、特に念入りにきれいにしましょう。

◆啓発用チラシ「[O157に注意しましょう](#)」(衛生研究所)

<腸チフス>

1件の報告がありました。渡航先(ネパール)での感染が推定されています。

<デング熱> 1件の報告がありました。渡航先(インドネシア)での感染が推定されています。近年、日本では年間発生数が増加傾向にありますが、すべて日本国外での感染で、タイ、インド、インドネシア、フィリピン、ミャンマー、ラオス、カンボジアなどでの感染が多く報告されています。

海外での感染症予防情報掲載ホームページ

これから海外旅行に出かける人が増えることが予想され、感染症に注意が必要です。

○[海外に渡航される方へ](#)(保健所)

○[夏休みに海外へ渡航される皆さまへ](#)(厚生労働省検疫所)

○[夏休み期間中における海外での感染症予防について](#)(厚生労働省)

<レジオネラ症> 肺炎型4件の報告がありました。感染原因等詳細については現在調査中です。

<アメーバ赤痢> 腸管アメーバ症3件の報告があり、すべて国内での感染が推定されています。2件は経口感染が、残る1件は性的接触による感染が推定されています。

<急性脳炎> 学童の報告が1件ありました。症状は発熱(38℃以上)、痙攣と意識障害で、病原体検索中です。

<劇症溶血性レンサ球菌感染症> 40歳代男性の報告が1件ありました。血清型はG群(国内の統計では、本症の起原菌ではA群の次にG群が多く報告されています。)です。感染原因感染経路不明です。

<後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)> 2件の無症状病原体保有者の報告がありました。1件は国内での同性間性的接触による感染が推定されており、残るもう1件は感染経路感染地域等不明でした。

<侵襲性インフルエンザ菌感染症> 70歳代男性1件(ワクチン接種歴不明)の報告がありました。症状は発熱、意識障害、ショックで、血液よりインフルエンザ菌が検出されています。莢膜型はe型でした。

<梅毒> 1件の早期顕症Ⅱ期(梅毒性乾癬)の報告があり、国内での性的接触による感染が推定されて

います。

<バンコマイシン耐性腸球菌感染症> 1件のVanA型 (*Enterococcus faecium*) の報告がありました。中心静脈カテーテルからの感染が推定されています。

<風しん> 40件(男性27件、女性13件)の報告がありました。うち37件で予防接種歴が無いか確認できませんでした。風しんは現在流行が続いています。先天性風しん症候群予防のため、妊娠を予定・希望している女性は予防接種を受けましょう。予防接種の助成が実施されています。

◆横浜市感染症臨時情報(衛生研究所)

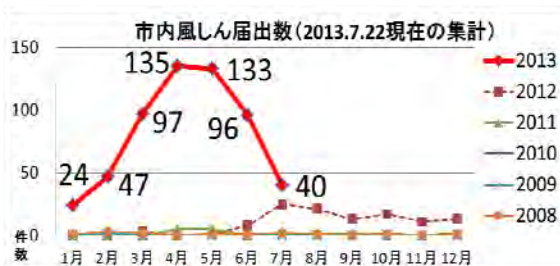
◆横浜市の風しん予防接種助成の詳細(保健所)

定点把握疾患

平成25年6月24日から平成25年7月21日まで(平成25年第26週から平成25年第29週まで。ただし、性感染症については平成25年6月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:92か所、内科定点:60か所、眼科定点:19か所、性感染症定点:27か所、基幹(病院)定点:4か所の計202か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計152定点から報告されます。

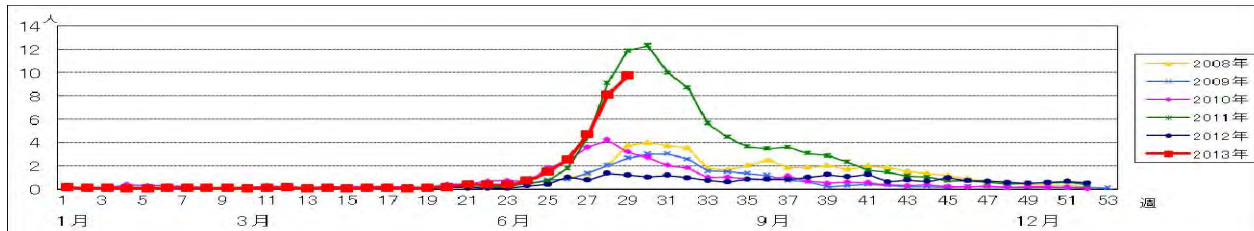


平成25年 週一月日対照表

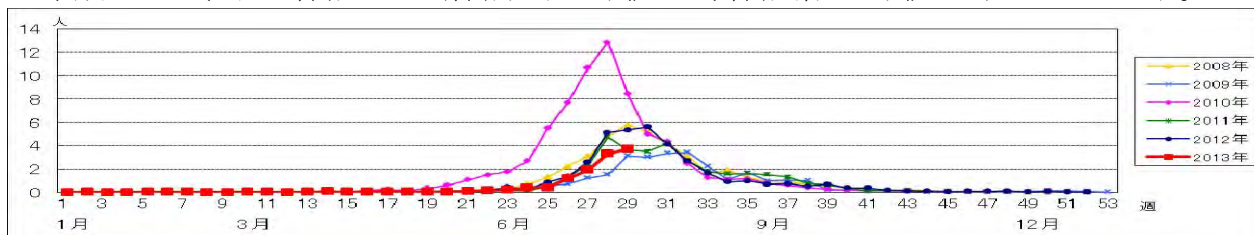
第26週	6月24日～	6月30日
第27週	7月1日～	7月7日
第28週	7月8日～	7月14日
第29週	7月15日～	7月21日

<手足口病> 第28週に市全体で定点あたり8.07と、警報レベル(警報発令基準値5.00)となりました。第29週は9.71とさらに増加しています。手足口病の原因ウイルスは、CA16やEV71が一般的ですが、今年は全国でCA6が多く検出されており、市内の病原体定点からもCA6が多く検出されています。CA6を病原とする手足口病は、水疱がかなり大きく、四肢末端に限局せず、広範囲に認められるといった臨床的特徴があり、罹患1~2か月後の爪甲脱落症も報告されています。感染経路は飛沫感染、接触感染、糞口感染であり、乳幼児における感染予防は手洗いの励行と排泄物の適正な処理が基本です。

◆横浜市感染症臨時情報(衛生研究所)



<ヘルパンギーナ> 市全体で第29週3.73と増加しています。区別では、栄区10.33、瀬谷区9.50、港南区7.40、緑区3.33と、4区で警報レベル(警報発令基準値6.00、警報解除基準値2.00)となっています。



<性感染症> 6月は、性器クラミジア感染症は男性が24件、女性が15件でした。性器ヘルペス感染症は男性が9件、女性が11件です。尖圭コンジローマは男性3件、女性が0件でした。淋菌感染症は男性が21件、女性が0件でした。

<基幹定点週報> 第27週に無菌性髄膜炎の報告が1件(6歳男児。発疹などの症状から近医にて手足口病の診断有り。その後発熱(40℃)し、髄膜刺激症状出現。病原体検索中。)ありました。マイコプラズマ肺炎では第26週1.00、第27週0.00、第28週0.00、第25週0.66と落ち着いています。細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。

<基幹定点月報> 6月はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症9件が報告されました。ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:4か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

<ウイルス検査>

7月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点42件(鼻咽頭ぬぐい液41件、ふん便1件)、内科定点1件(鼻咽頭ぬぐい液)、眼科定点1件(眼脂)、基幹定点15件(鼻咽頭ぬぐい液6件、ふん便2件、髄液6件、血漿1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎17人、手足口病11人、ヘルパンギーナ8人、発疹5人、胃腸炎1人、内科定点は発疹1人、眼科定点は流行性角膜炎1人、基幹定点は手足口病、ヘルパンギーナ各2人、無菌性髄膜炎、熱性けいれん、伝染性単核症疑い、肺炎各1人でした。

8月8日現在、小児科定点の気道炎患者とヘルパンギーナ患者各1人からアデノウイルス2型、気道炎患者1人からコクサッキーウイルス(以下Cox)A2型、発疹患者1人からCoxB3型が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の手足口病患者10人、ヘルパンギーナ患者6人と発疹患者1人のあわせて17人からCoxA6型、気道炎患者4人からアデノウイルス2型(2人)、CoxA2型(1人)とCoxA8型(1人)、基幹定点のヘルパンギーナ患者2人からCoxA2型、手足口病患者2人からそれぞれCoxA6型とエンテロウイルス71型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【 検査研究課 ウイルス担当 】

<細菌検査>

7月の感染性胃腸炎関係の受付は、基幹定点から6件、定点以外の医療機関等からは12件あり、赤痢菌(インドに渡航)、腸管出血性大腸菌、チフス菌(ネパールに渡航)、サルモネラが検出されました。

その他の感染症は、小児科から3件、基幹病院から3件、その他が12件でした。バンコマイシン耐性腸球菌はvanA型の*Enterococcus faecium*でした。

(次ページに表)

表 感染症発生動向調査における病原体検査(7月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	7月			2013年1月～7月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
	0	6	12	3	61	34
菌種名						
赤痢菌		1			2	1
腸管病原性大腸菌					2	
腸管出血性大腸菌		1	11		1	22
腸管毒素原性大腸菌					2	
チフス菌		1			4	
パラチフスA菌						2
サルモネラ		1		1	18	
不検出	0	2	1	2	32	9

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	7月			2013年1月～7月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
	3	3	12	48	18	131
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌	T1			1	1	
	T2			5		
	T4	1		9		
	T6	1		6		
	T12			4		
	T25			2		
	T28			3		
	T B3264			2		
B群溶血性レンサ球菌				1		
G群溶血性レンサ球菌						2
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌		3			9	
バンコマイシン耐性腸球菌			1		1	21
<i>Legionella pneumophila</i>			2			2
インフルエンザ菌			1	1		2
肺炎球菌			4	5	3	18
<i>Neisseria meningitidis</i>						2
黄色ブドウ球菌			1	2	4	1
結核菌						10
緑膿菌						63
その他			2			2
不検出	1	0	1	7	0	8

*: 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 検査研究課 細菌担当 】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成25年6月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成25年7月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成25年6月のアクセス件数、アクセス順位及び平成25年7月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成25年6月)

平成25年6月の総アクセス数は、210,951件でした。主な内訳は、感染症情報センター67.1%、食品衛生12.0%、保健情報7.5%、検査情報月報5.1%、生活環境衛生2.2%、薬事0.9%でした。

(2) アクセス順位 (平成25年6月)

6月のアクセス順位(表1)

表1 平成25年6月 アクセス順位

は、第1位が「リステリア症について」、第2位が「手足口病について」、第3位が「クロストリジウム-ディフィシル感染症について」でした。

順位	タイトル	件数
1	リステリア症について	9,746
2	手足口病について	6,412
3	クロストリジウム-ディフィシル感染症について	5,560
4	マイコプラズマ肺炎について	4,592
5	アデノウイルス感染症について	3,966
6	ぎょう虫(蟻虫)症について	3,929
7	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	3,898
8	衛生研究所トップページ	3,592
9	サイトメガロウイルス感染症について	3,508
10	風しんについて	3,326

データ提供:総務局IT活用推進課

6月の総アクセス数は、前月より14%増加しました。今月の2位の「手足口病について」は、現在、とても流行しています。乳幼児における感染予防は、手洗いの励行と排泄物の適正な処理が基本となります。

また、マイコプラズマ肺炎のアクセス件数は、年間を通じて多くなっています。国立感染症情報センターの報告によると、マイコプラズマ肺炎の定点当たり報告数は、平成25年第23週(6月3日～9日)0.54、第24週(6月10日～16日)0.57、第25週(6月17日～23日)0.54、第26週(6月24日～6月30日)0.52となって、推移しています。

厚生労働省のマイコプラズマ肺炎に関するQ&A(一般人向け) 平成24年10月改訂

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou30/index.html>

「リステリア症について」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/listeria1.html>

「手足口病について」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/handfoot2.html>

「クロストリジウム-ディフィシル感染症について」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/clostridium1.html>

(3) 電子メールによる問い合わせ（平成25年7月）

平成25年7月の問い合わせは、5件でした(表2)。

表2 平成25年7月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
シェアハウスに関する相談場所について	1	感染症・疫学情報課
熱中症について	1	感染症・疫学情報課
ヘルペスについて	1	感染症・疫学情報課
インフルエンザ予防接種の集団接種について	1	感染症・疫学情報課
伝染性単核症について	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事（平成25年7月）

平成25年7月に追加・更新した主な記事は、17件でした(表3)。

表3 平成25年7月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
7月 4日	平成25年 熱中症情報	掲載
7月 9日	感染症に気をつけよう(7月号)	掲載
7月10日	メキシコにおけるA(H7N3)型鳥インフルエンザウイルスによる人の感染について	掲載
7月10日	近年、人間への感染が見られた豚由来変異型インフルエンザウイルスについて	掲載
7月11日	平成25年 熱中症情報	掲載
7月11日	風しんの発生状況	掲載
7月11日	手足口病の発生状況	掲載
7月12日	肺炎球菌感染症について	掲載
7月17日	平成25年 熱中症情報	掲載
7月17日	熱中症(熱射病、日射病)を予防しましょう	更新
7月18日	手足口病の発生状況	掲載
7月23日	オーストラリアのこどもの定期予防接種について	掲載
7月23日	機能強化への取組	更新
7月23日	平成25年 熱中症情報	掲載
7月25日	風しんの発生状況	掲載
7月25日	手足口病の発生状況	掲載
7月26日	感染症に気をつけよう(8月号)	掲載

【 感染症・疫学情報課 】